



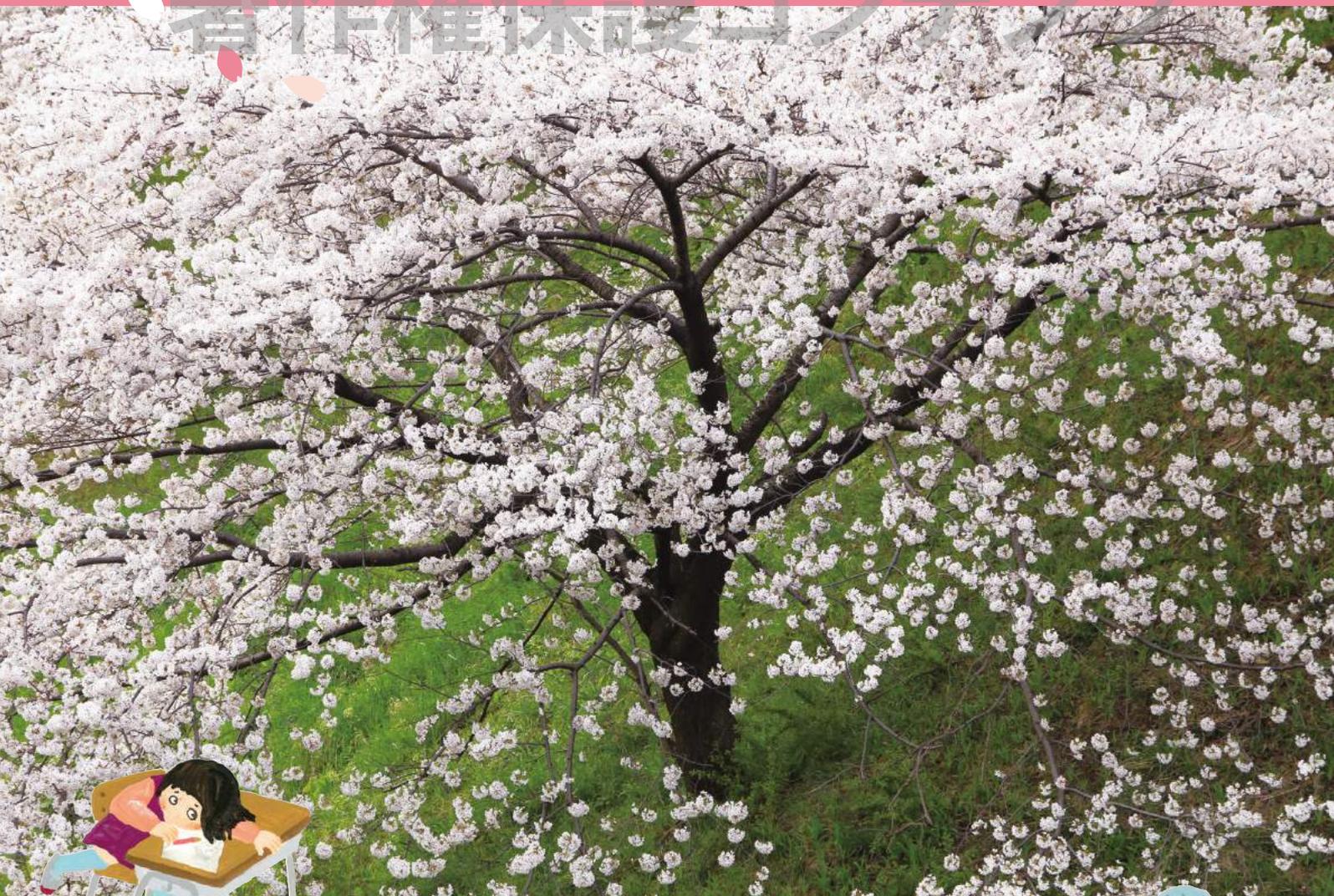
春は別れと出会いの季節



新しい一歩を踏みだす

子どもたちに手渡す本

著作権保護コンテンツ



保育園・幼稚園への入園、真新しいランドセルを背負って学校の門をくぐった入学式。

それは未知の世界に飛び立つ日。満開の桜もおめでとうと祝福しています。

そんな、新しい一歩を踏みだす子どもたちに、始まりと希望の絵本をお届けします。

それぞれの絵本の作者や訳者からもコメントをもらいました。



桜の写真／矢作孝志 イラスト／壁谷美扶

著作権保護コンテンツ

前成長
進長



『きみたちにおくるうた
むすめたちへの手紙』

文/バラク・オバマ
絵/ローレン・ロング
訳/さくまゆみこ 1,500円 (明石書店)

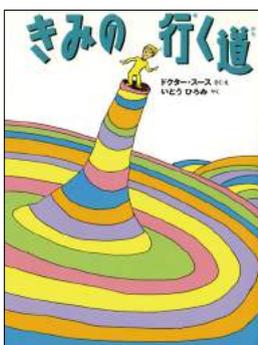
社会に大きな影響を与えた13人の人物を例に、オバマ元アメリカ大統領が父親として、自身の娘たちに贈る愛の賛歌であると同時に、世界中の子どもたちへ語りかけます。



『いつでも星を』

文/メアリ・リン・レイ
絵/マール・フレイジー
訳/長田弘
1,500円 (プロンズ新社)

夜空にきらめく星以外にも、星はいろんなところにあるのだと、やさしく語りかけます。それは誰もが心に持つことができる希望の星。



『きみの行く道』

作・絵/ドクター・スース
訳/いとうひろみ
1,600円 (河出書房新社)

頭に脳みそが詰まっっていて、靴に足が入っているきみは、外の世界に向かって、どこへでも自分で決めて歩いていけるんです。何が起ころうとも大丈夫!



『きぼう ころもひらくとき』

作/ローレン・トンプソン
訳/千葉茂樹
1,400円 (ほるぶ出版)

心を開き、ひとりひとりが誰かを大切にすることで、心に希望を育てることができる、世界各国の子どもたちの写真を通して訴えています。



『あたらしいぼく』

文/シャーロット・ゾロトウ
絵/エリック・ブレグヴァッド
訳/みらいなな
1,200円 (童話屋)

昨日まで遊んでいたビー玉やぬいぐるみが突然ガラクタに思ってしまったり、壁紙の柄が急に子どもっぽく思えたり。少年は少しずつ青年に近づいていきます。



『はじまりのはな』

文/マイケル・J・ローゼン
絵/ソーニャ・ダノウスキ
訳/蜂飼耳 1,500円 (くもん出版)

仲間とはぐれた渡り鳥のローザはアンナと飼いイヌのミールとともにひと冬を過ごします。やがてまた春がめぐり、ローザの旅立ちのときがきました。



『きみがしらないひみつの三人』

作・絵/ヘルメ・ハイネ
訳/天沼春樹
1,300円 (徳間書店)

きみが生まれた日、3人の友だちがやってきてきみの体の中で働き始めます。きみがこの世を去るその日まで、3人はずっときみと一緒にです。



『雨ニモマケズ』

作/宮沢賢治
絵/袖木沙弥郎
1,500円 (ミキハウス)

この文章は詩ではなく、当時、病床にあった賢治の祈りそのものだったと、賢治の弟・清六が語っています。清六の孫による解説文にも味わいが。

新刊

著作権保護コンテンツ



来日記念インタビュー

バーバラ・マクリントックさん

ビクトリア調を思わせる独特の作風が持ち味で、精緻に描き込まれた背景に遊び心もいっぱい。『ないしょのおともだち』で日本でも人気のあるマクリントックさんの来日を記念し、作品の舞台裏をたっぷりお聞きしました。

写真提供／B・マクリントック



クリスマスツリーの前で、姉のキャスリン(右)と一緒に。

私

はアメリカの東海岸のニュージャーシー州にある小さな町、クリントンの農村地域で生まれました。9歳まで暮らした家は農場に囲まれていて、写真家だった父は11kmほど離れた町で写真館を営んでいました。

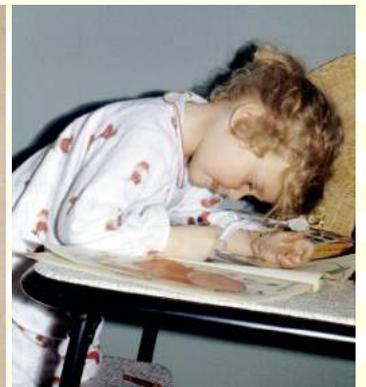
自宅には絵本をはじめ、ひとつおりの本がそろい、近くに住んでいた祖父母の家にもたくさん蔵書がありました。

祖母はモンテッソーリのメソッドに基づいて子どもたちに本を読んでいた人でした。それは母にも受け継がれていたため、物心がついた幼いころから姉と一緒に読みかきをしてもらっていました。

父もやはり本が好きで、小さいころから愛読していた絵本や子どもの本がたくさんありました。古典的な本も多く、生まれ育った家は、20世紀はじめころの画家の作品にもふられる環境にあったのです。

お誕生日やクリスマスといった特別な日に、両親と祖父母は私たち姉妹に本をプレゼントしてくれました。そして、読みかきを通して、子どもたちに惜しみない愛情を注いでくれたのです。

その当時、クリントンには公共の図書館はなく、月に2回、小さなバスにぎっしりと本を積んだ移動図書館が家の前にやってきました。今も鮮明に覚えているのは、本を借りる



一心に絵を描くバーバラと当時の絵。

ときのワクワク感です。図書カードに貸し出しスタンプを押してもらったり、宝物を大事に胸に抱え、バスを降ります。移動図書館が再びやってくる日まで、どの本も熱心に何度も何度も読みました。

子どものころのお気に入りにはイソップの寓話を両親に読んでもらうことで、モリス・センダックが絵を描いた「こぐまのくまくん」シリーズ(福音館書店)なども好きでした。このころに出合った物語は私の想像力の糧となり、絵本作家としての人生の土台をつくってくれました。

絵を描くことは幼いころから大好

この人にあれもこれも

絵本作家さん こんにちは！



『ゆき』
などで
おなじみ！

著作権保護コンテンツ

きくちちきさん

骨董市で絵本と運命の出会い

個展で発表した手づくり絵本が編集者たちの目にとまり、
繊細さとダイナミックさを併せ持つ作風で、一躍人気作家の仲間入り。

引っ越して間もない新居にある、ちきさんのアトリエを初披露！

撮影／石川正勝

PROFILE

きくち・ちき

1975年北海道生まれ。絵本作家。個展のたびに手製本の絵本を発表し、人気を博す。2012年『しろねこくろねこ』（学研）、『やまねこのおはなし』（作／どいかや イースト・プレス）で2冊同時にデビュー。2013年プラティスラヴァ世界絵本原画展（BIB）で金のりんご賞を受賞。

100年前の絵本に
衝撃を受けた

実を言うと、僕はもともと絵本に興味があったわけではないんです（笑）。

絵本を描きたいと思ったきっかけは、骨董市でした。僕は古いものを見てまわるのが好きで、あるときまたま見つけたのが、100年前に描かれた絵本でした。それは、M. ブレード・モンヴェルというフランスの画家が描いた絵本で、ちょっとした楽譜もついて歌いながら絵本を見る、そんなつくり。それがあまりにも素敵で、見た瞬間、「100年前の絵本を100年後の僕が見て、こんなに感動できるんだ！」と、ものすごい衝撃を受けたのです。

それからもう無性に絵本が描きたくなって、とにかく描いてみようと思ったのが始まりです。33歳、2009年のことでした。

なんとなくふわっと描きたいものがあったので、その勢いのままおはなしを考え、絵を描き、ファイリングを始めました。何作かたまたま、展示をしてみないかと声をかけてくれる人がいて、それならと手製本にしました。

すると、たまたまその展示に来た出版社の編集者が僕の手づくり絵本を見て、「うちで出しませんか」と声をかけてくれたのです。

著作権保護コンテンツ

『いろがみびりびりぴったんこ』

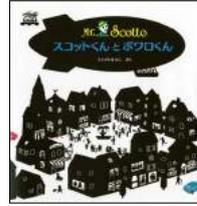
赤い色紙をびりびりちぎります。あらわれたのは赤くん。赤くんは仲間と一緒にりんごになりました。チョウチョさんがやってきて、いろいろな色のお友だちとみんなでお花畑になり、それから機関車になってがたんごとん。巻末に遊び方も載っています。



作/松田奈那子
1,100円(アリス館)

『スコットくん と ポワロくん』

ポワロくんから、お誕生日パーティーの招待状が届きました。ポワロくんに頼まれた3つのほしいものを探しにスコットくんは街に出かけ、買いものをしました。パーティーでポワロくん喜んでくれましたでしょうか？



作/フィリケつこ
1,500円(あすなろ書房)

『ペンギンかぞくと おそろしい山』

冬が終わり、ペンギンが南極に来て、巣づくりをします。お父さんとお母さんは交代で卵をあためエサをとり懸命に子育てをしています。子どもが天敵に襲われたり、人間のゴミが原因で亡くなることもあります。厳しい自然の中で生きるペンギンです。



著/藤原幸一
1,400円(アリス館)

『北極の宝もの』

北極の冬は白の世界、昼間も暗く、色は風に飛ばされてどこかに行ってしまったかのようです。ある晩、空からの不思議な音を聞いたおじいちゃんは、女の子を丘に連れていきました。やがて現れたオーロラは、さまざまな色で夜空を染めてくれました。



文/ダナ・スミス
絵/リー・ホワイト
訳/みはらいずみ
1,400円
(あすなろ書房)

『カラフル』

カラフルな丸い笑顔の表紙を開くと、そこにも丸い小さな笑顔が一行でお出迎え。次には三角形がよきよきよき現れました。四角や指のような形などさまざまな形はどれも色彩豊か。のびたり、縮んだり、集まったり。色を感じてみましょう。



作/新井洋行
750円(岩崎書店)

『まめまめくん』

まめまめくんは豆粒みたいに小さな男の子。ちっちゃくてマッチ箱の中でも寝られるほどでしたが、元気でなんでもできました。学校に行くようになったまめまめくんは、自分がものすごく小さいことに気がつきました。何をすることも小さすぎるのです。



文/デヴィッド・カリ
絵/セバスチャン・ムーラン
訳/ふしみみさを
1,000円(あすなろ書房)

定期購読限定プレゼント

2016年9月11月に発売された新刊絵本の中から、読みかきせにもおすすめの100冊を選びました。絵本で子どもたちとすてきな時間を過ごしてください。

もう読んだ？

新刊
100!!

※出版社五十音順

- マークは乳幼児から、
- 曲線は中・高校生も楽しめる本です。

『くいしんぼうのクジラ』

海の魚も川の魚も食べ飽きたクジラは、陸の野菜やくだものも食べてみたくなりました。あまりの興味に、クジラはまだ食べたことのないものに興味をわくばかりです。とうとう空を飛んでおいしいもの探しに出かけることにしました。



作/谷口智則
1,400円(あかね書房)

『けもののおいがしてきたぞ』

表紙もページを開いても、そこにはけもの道が広がっていて、草木が騒いでいるようです。けもの道に雨が降り、風が吹き、岩が転がり、虫や鳥、けものが出てきます。草木が逆さまに生えていることも。動物の目が光り、生きものの体温を感じます。



作/ミロコマチコ
1,600円(岩崎書店)

『いのる』

世界を旅して生と死の現場に向き合ってきた著者は、人々の祈る姿を見てきました。わが子の無事を、平和な時間を、亡くなった人の平安を……。人はなぜ祈るのでしょうか？ひとりでは生きていけない存在だからこそつながりを求めるのかもかもしれません。



著/長倉洋海
1,400円(アリス館)

『かぜ』

マチルデと弟のマーチンは風がどこから吹いてくるのか、見に行くことにしました。大きな風車を回す力強い風や、電線をブォーンと鳴らす風来坊、北国の冷たい風、あつい国のあたたかい南風など。さまざまな顔を持つ風に会えました。



作/イブ・スバング・オルセン
訳/ひだれいこ
1,300円(亜紀書房)

※JPIC直販の定期購読の方に、抽選で新刊絵本100冊から1冊をプレゼントします。同封のアンケート用紙に希望する絵本のタイトルと必要事項を書いて、郵送またはファックスしてください。